

子宮がん検診(神奈川方式)

動 向

神奈川方式による子宮がん検診は、昭和44年より神奈川県産科婦人科医会との協力事業として、県下の医会会員医療機関から郵便により送付されてくる細胞、組織材料について検鏡・判定を行い、その結果を医療機関に返送しているシステムである。通常日母方式と呼ばれている。

前頁の車検診が行政主導で行われているのに対して、神奈川方式は産科婦人科医会会員主導で行われており、両者相補って本県の子宮がん検診の骨格をなすものである。

頸部検診において、検査数（前年比+1,234）、受診者数（前年比+1,054）ともに増加した。平成14年、15年と減少が続いたのようやくの+転換である。

精度管理については、当該医療機関の協力により、精密検査対象者についての追跡調査が当協会の情報処理部により行われ、県産科婦人科医会のご協力により年一回の報告会を開催している。

方 法

神奈川方式子宮がん検診は日母設立20周年記念事業としてスタートした。従って実施方法については昭和53年に日母がん対策委員会がまとめた子宮がん検診の標準化（日母方式）への答申によっている。従って対象婦人の年齢は30歳以上としながら既婚婦人ではその限りではない。通常の婦人科的診察を行うこと、コルポスコープを初回から細胞診と併用して使用することが奨められている。

体がん検診は頸がん検診受診者の内、年齢50歳以上のもの、閉経以後のもので問診で不正出血を訴えたことのあるものを中心に内膜細胞診を行っている。

子宮頸がん検診

平成16年度の子宮頸がん検診受診者は27,558名（前年度26,504名）で2年振りに増加した。

がん確定者は69名（発見率0.25%）、内訳は頸がん63名、体がん5名、その他のがん1名であった。その他のがん1名の内訳は卵巣がんⅢ期であった。

年齢階級別頸がん確定数では、29歳以下8名、30歳代19名、40歳代15名、50歳代10名、60歳代7名、70歳代以上10名であった。30歳代以下の若年層とそれ以上の年齢層の比較では、30歳代以下の受診者数11,021名（総数の40.0%）、がん確定数27名（発見率0.24%）に対して、40歳代以上の受診者数16,537名（総数の60.0%）、がん確定数42名（発見率0.25%）であった。病期別的には30歳代以下で発見された頸がん27名中、0期22名、Ⅰa期2名、Ⅰb期以上1名、腺がん2名で早期がん中心であるのに対し、40歳代以上では42名中、0期18名、Ⅰa期2名、Ⅰb期以上13名、病期不詳1名、腺がん2名で高年代層に進行がんの多い傾向は変らなかった。

頸部腺がんは増加傾向が示唆されているが今年も4名のみであった。

異形成については確定者数164名（発見率0.59%）、内訳は軽度異形成98名、中等度36名、高度28名、腺異形成2名。年齢階層別ではやはり30歳代以下が82名（発見率0.74%）で、40歳以上82名（発見率0.50%）に較べて高率であった。

子宮体がん検診

平成16年度の体がん検診受診者は7,864名（前年度7,760名）、頸がん検診受診者の28.5%（前年度29.3%）であった。

がん確定者は22名（発見率0.28%）。内訳は子宮体がん19名であった。その他に内膜増殖症15名が検出された。発見された体がんの内0期とⅠ期が10名、早期がんは53%であった。

関係の集計表は86頁に掲載